

インド渡航歴40回超!

佐藤良純の No.21

インド・釈尊あれこれ紀行



上は1971年当時のサンチの第一塔、
下は2006年当時の第三塔。共に筆者撮影

サンチの大塔

インド渡航歴40回超!

佐藤良純のインド・釈尊あれこれ紀行 No.21



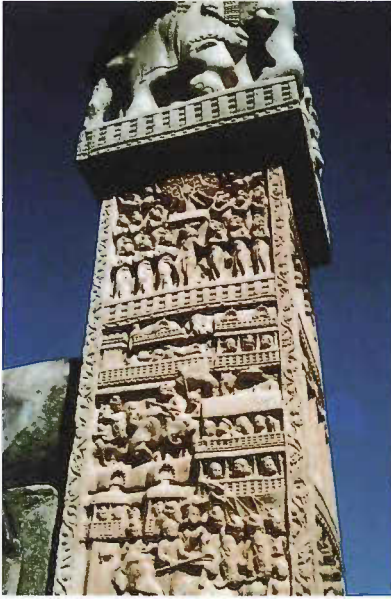
大塔の東西南北に精巧な彫り物で裝飾された門が建っている

中央インド、マドヤプラデーシュ州の中心都市ボーバルを中心に多くの仏塔がある。この地方の首都はヴィデイサにあり、王は仏教徒ではなかったが多くの仏塔が造られ、サンチ大塔から北へ、サトダラ、ソナリ、アンデー、ボジョブルと石柱が続いている。

サンチ大塔がアショカ王によって建てられた時は現在の半分の大きさで、刻文によると初期にはカカナヴァア又はカナヤと呼ばれていた。このサンチ大塔のある遺跡は、小高い丘の上に造られ、日が落ちると人々は自分が宙に浮かんでいるように感じる。

仏塔はいずれも丸い覆鉢形で、中央部の2階部分を一周できる通路がある。四方には鳥居型の門があり仏伝図、その他多くの人物像が彫られている。鳥居は最初に南門、次に北門、東門、西門の順で造られた。

各々の門は2本の柱に支えられ、上部にはライオン像がある。各柱の4面には仏陀の生



ジャータカが彫られている塔



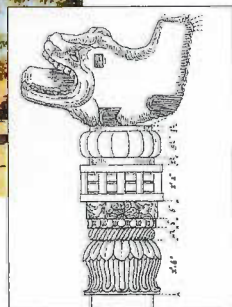
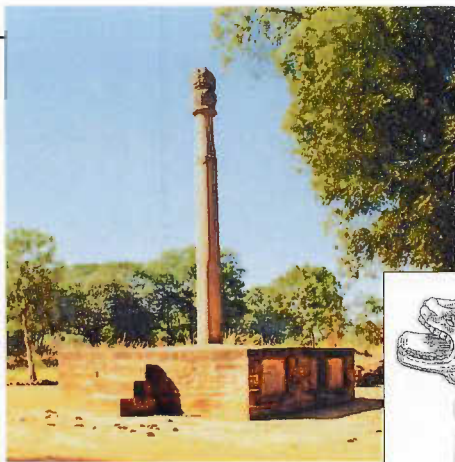
アショカ王の仏塔のライオン

涯とジャータカ（釈尊の前世の物語）が描かれ、釈尊の教えを表す法輪も見られる。また、天女のような女性像も彫られている。第二、三塔の前の鳥居も同時代のものだ。

こうした仏教遺跡は紀元前3世紀アショカ王の時代から紀元前2世紀シユンガ王朝、5世紀グプタ王朝、7世紀ハルシヤ王朝、その後12世紀の終わりまで長期にわたって造営された。ちなみにシユンガ王朝は紀元前1世紀に衰退し、この地方は4世紀まで西クシヤトラバ王朝の支配下に置かれる。7世紀になるとハルシヤ王朝の支配下でこの地方も栄えるが、ハルシヤ王朝以後、仏教の影響を受けた建造物は中央インドでは見られなくなる。

サンチ遺跡は1818年にタイラー将軍が再発見するまでの600年間、人の手が入らず昔の姿のまま残されていた。覆鉢は崩れ、鳥居は倒れていたが1881年から修復され始めた。また、サンチ大塔からは釈尊の二大弟子、舎

サンチから60キロ離れたヘリオドラスの柱とマカラの絵



1971年、全日本仏教会と訪印したときの筆者

利弗と目連の遺骨も発見された。

サンチ遺跡の北東60キロのベズナガールには紀元前113年頃に建てられた石柱がある。当時北西インドのガンダーラ地方にギリシヤから派遣されたアンティアルシダス王の大使であったヘリオドルスにちなんで、ガルード神の柱と呼ばれている。1877年、イギリス人の考古学者カニンガムにより発見され、ヒンドゥー教のヴァスデヴァ寺院の遺跡の一部であることが判明した。

また、この柱の近くにはマカラ（像と魚、鰐が合体した神話上の生物）が彫られている石柱が残っている。

佐藤良純

大正大学名誉教授

さとう・りょうじゅん 昭和7年東京生まれ。大正大学、同大学院、インドデリー大学院に学ぶ。昭和34年より大正大学で教鞭をとり、教授、学科長を経て、平成14年退職、大正大学名誉教授となる。インドへの初渡航は昭和38年、以来インドへ訪れること、40有回数。著書に「ブツタガヤ大菩提寺」、「釈尊の生涯」など多数。